The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Saddhammajotikā 僧院 U Pho Thi 図書室所蔵貝葉古写本調査報告

笠　松　　直

1．本調査の中核的課題

本調査計画の主たる課題は，ミャンマー（ビルマ）の僧院所蔵の古写本を電子的に撮影し，情報学的手法の応用により成果を速やかに取り纏めて報告することにある[1]．東南アジア各地に伝わる貝葉写本は，南方仏教史乃至パーリ文献史研究の第一次資料であるが，しばしば保存状態や管理体制に問題を抱え，甚だしくは存在を等閑視されて湮滅・散逸の危機にある．こうした認識の下，各地で写本調査と保存の試みがなされている．本計画もその一環をなし，パーリ文献協会(PTS）と協調して資料収集を進め，パーリ語諸文献の(再)校訂出版に資そうとするものである[2]．この際，宗教学や歴史学等，隣接分野の将来の研究促進を期して現地の言語（主にビルマ語）による著作を含む蔵外文献の情報をも網羅的に収集する[3]．当調査の成果は web page 乃至 catalogue によって随時公開する[4]．

2．Saddhammajotikā 僧院 U Pho Thi 図書室所蔵貝葉写本について

現在の我々の主たる調査対象はミャンマー南部モン（Mon）州タトン（Thaton）の Saddhammajotikā 寺院附属 U Pho Thi 図書館である[5]．これは現地の富裕な在家信者 U Pho Thi 氏の寄付により 1929 年に創設されたものと伝えられる[6]．第五結集（1871 年）以前の写本は数少なく，所蔵写本の年代は比較的新しい．1928 年前後の書写写本が相当数を占める[7]．貝葉写本については約 800 束を蔵し，本稿執筆時点でうち約 300 束について oiling・撮影・データ整序を終了している．貝葉は殆どが寸法縦 4.5～7.0 cm，横 50 cm 前後であり，典型的には二穴を備え，竹の軸を通して，赤いラックの塗られたチークのカバーに留められている．保存状態は概して良好だが，一部カバーを持たない写本もあり，汚損・破損を被っている場合もある．以下，任意に数例を挙げて本図書室所蔵図書の内容を瞥見する．

特に古い書写年代を示す写本は，例えば: UPT 195 *Khuddasikkhā-nissaya*（AD

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

1769)．これは「具足戒をうけた比丘が最初に暗誦し学ぶ Vinaya の綱要書」[橘堂 1997: 4] のビルマ語 nissaya である．同様に新入比丘用という Vinaya 綱要書 *Mūla-sikkhā*（UPT 513.5）とその ṭīkā（UPT 513.5）及び nissaya（UPT 386.2; 435），乃至 *Sikkhāpadavalañjana* の nissaya（UPT 457）が見られるのは[8]，沙弥の教育に資するというこの図書館の設立目的を如実に反映する．この他，律関係の典籍は UPT 515.1 *Vinayasaṅgaha*（AD 1928）とその nissaya（UPT 387），Mon 語による nissaya（UPT 262, 284）が見られ，さらに同書の註釈も見られる：UPT 532 *Vinayālaṅkāra-ṭīkā*（AD 1928, 他に UPT 721; UPT 392 は nissaya）．UPT 501 *Vajīrabuddhi-ṭīkā-pāṭh*（AD 1927）及び UPT 698 *Vajīrabuddhi-ṭīkā* は恐らく Vinaya の復註文献であろう[9]．

勿論 Abhidhamma 関係写本も多数所蔵される．稀少な写本ないし情報を含むものが見出されるかもしれない．UPT 530.2 *Abhiddhammatthasaṅgaha-dīpanī*（UPT 393 & 725 はその nissaya，295 は Mon 語の nissaya）は，*Abhiddhammasaṅgaha* の古註の復註の可能性があろう．UPT 520.1 *Nāmarūpapariccheda*（UPT 384.3 *N.-nissaya*）は 20 世紀初頭の出版があるが，その ṭīkā の情報は少ない模様である．当図書室には UPT 528.3 *Nāmarūpapariccheda-ṭīkā* が見られる[10]．

既報の通り，仏伝文学 Jinālaṅkāra 関連写本が複数見られる．GRAY 1894 を再検討する際の典拠となろう：UPT *Jinālaṅkāra-aṭṭhakathā*（AD 1927）; UPT 360 *Jinālaṅkara-nissaya*（*Jinālaṅkāra-ṭīkā*）（AD 1873）[11]．

周知の如く，中世ビルマはパーリ文法研究で名高い．蔵書中にも関連領域の書籍が多数存する[12]．最古層の書写年代を持つ写本群のうち UPT 336 *Subodhālaṅkāra-pāṭh*（AD 1778）及び UPT 282 *Subodhālaṅkāra-nissaya*（AD 1778）は，13 世紀のスリランカの文典家 Saṅgharakkhita によるパーリ修辞論とその Mon 語による nissaya である[13]．Saddanīti 関連の写本も多数見られる：UPT 499.2 & 544 *Saddanīti-ṭīkā*; UPT 639 *Saddanīti-ṭīkā-nissaya (Du) thup*（AD 1931）; UPT 711 *Sadd. Padamālā, Dhātumālā*; UPT 643 & 723 *Sadd. Padamālā-nissaya*; UPT 724 *Sadd. Dhātumālā-nissaya*.

仏教関係のテキストのみならず，世俗的な主題に関わる典籍も数多く見られる．例えば：UPT 139 *Rāja-vaṅ-pyuḷ*（AD 1763，王統史詩）; UPT 54 *Jambū-tuṃ-che*: *-kyam*:（AD 1859，ビルマ語医学文献）; UPT 90 *Gambhīsāra*（AD 1811，ビルマ語法学文献）; UPT 101 *Lokanīti-nissaya* 及び UPT 102 *Rājanīti-nissaya*（AD 1896，Nīti）; UPT 62 *Kappavaṇṇanā*（AD 1917，ビルマ語宇宙論文献）; UPT 65.1 *Bhūmilakkhaṇā*（天文学）．

16 世紀タイの Siri Maṅgala の著作 UPT 519 *Maṅgalatthadīpanī-pāṭh*（AD 1927）が見られるのは興味深い．これはタイでポピュラーな，説教用の大分の物と聞く[14]．

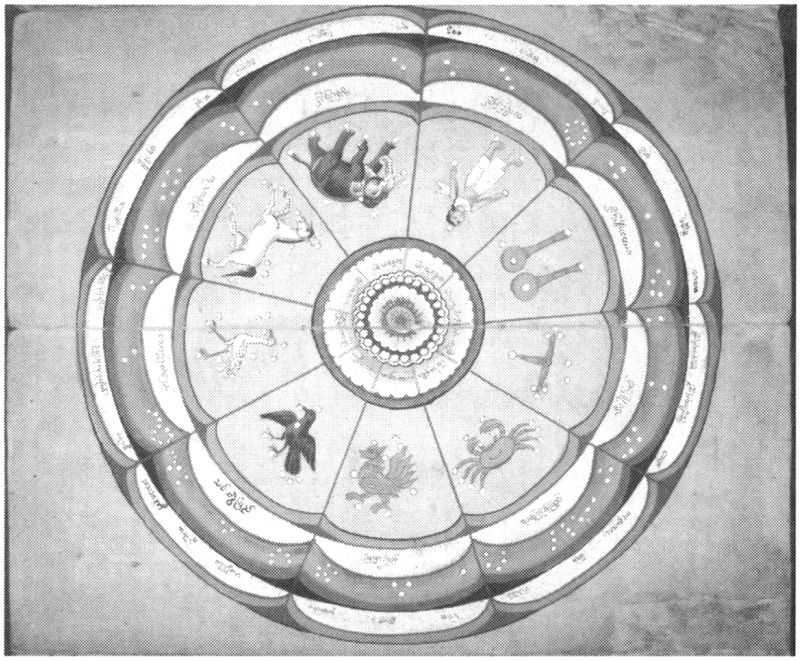
NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

これには nissaya もある（UPT 471．書写は AD 1931）．恐らく当地でも，その知識が実用されたものであろう．

3．残余の課題

本研究計画は主たる目的，即ち貝葉写本の情報収集については良好な成果を挙げつつある．他方，ホロスコープ（下図，寸法は縦 36 cm × 横 43 cm）や諸世界図等の折本絵画写本 *parabike* は，美麗ではあるが，所蔵数は 6 本ほどと少ない．



但し，本計画にとっては周辺的ながら，注意に値する課題を数点指摘できる．例えば写本を布で包んだ上に巻く binding tape（*sazigyo*）[15] の検討がそれである．*sazigyo* は，長さ 3 m ほど，幅 2〜3 cm ほどの組紐で，図案化した鳥獣や仏塔，傘蓋で装飾されるほか，写本の寄進者や筆写者等の情報が編み込まれている．そこから写本作成当時の社会情勢や，写本の流通範囲から信仰圏を推知することも出来よう．また，図書室には，貝葉写本だけではなく，20 世紀前半に出版された洋装本も多数所蔵される．虫害を被ること甚だしく，既に綴じが毀れたものも多い．稀覯本が含まれている可能性もあり，専門的な調査をするのが望ましい．

なお近隣の寺院には，やや小型ながら Kuthodaw pagoda と同様の大理石板に彫り込まれた大蔵経が存する．露天の石板の劣化は大分進んでいるように見受けられるが，未だ小仏塔の中に鎮座するなど保存状態が良好な石板も多数存し，美術的・建築学的見地，ないし Kuthodaw pagoda のそれとの比較の点で興味があろう．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

4．本計画の派生的成果：文化財保護と現地組織の自立的活動への支援

既に述べた如く，当該図書館は仏僧資格試験に資すべく創設されたものである．沙弥の寄宿舎機能を備えており，現在でも彼らの日常の生活場所であり続けている．現地奨学支援組織は，受験者たちの支援と図書室運営をその業務としている．嘗ては写本閲覧のため諸方から来訪者があったとも聞く．しかしその後，彼らは貝葉写本を持て余し，近年では写本は顧みられることなく埃に埋もれていた．これは写本の損耗，喪失を恐れたことも一因とされる[16]．

我々はこの計画において，「重要なものを出版して現地の人々の伝統文化意識を高め，世界の研究者たちにも裨益する」[清水・舟橋 2009: 94][17] のみならず，「写本情報収集業務等の諸事業を通じて…図書室支援者や信者組織等の文化財保護への意識醸成を図り，文化遺産の自立的継承・保全を支援する」[笠松 2013 [2014]: 109] ことをも目指した．我々は U Nyunt Maung の指導を得て，支援者たちに写本取扱及び管理技法を教授しつつ，これまで約 2 年間，食事や茶菓を共にしながら，共同で写本情報採取及び撮影作業に従事してきた．この間，我々は折に触れ現代のインド学・仏教学が古い貝葉写本に重要な価値を認めること等を彼らに説明した．今や彼らは，自らが護持してきた宝の価値を改めて識り[18]，図書室所蔵貝葉写本の維持管理を自立的に運営し始めている[19]．我々のカタログリストは彼らの貝葉写本管理に大きな助けとなろう．

これは本来海外支援を意図したわけではない．我々の目的は写本調査であって，主たる課題は写本の電子的記録（写真撮影）である[20]．しかしながらこの際，当初は迂遠と思えたとしても，現地奨学支援組織の諸氏の積極的参加・協力を得る

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

努力は，我々の事業の進展のために決定的に重要であった．彼らの助力がなければ，このような速やかな事業の遂行は不可能であったに違いない[21]．

5．付言

Saddhammajotikā 僧院長（Sayadaw）や現地奨学支援組織は所蔵写本の情報の公開に異存ない．但し，写本情報の商業利用（転用）等の悪用を懼れる．例えばある種の占星術文献の内容が黒魔術に用いられ，人を害することがありはしないかと懸念する．調査対象の写本群は，現に機能している信仰の場に属するものであり，文献リストやテキストの情報，画像の公開の際には一定の配慮を要する．一部非公開とする写本も存するが，了とされたい．

1）本調査研究実施に至る事情と調査の初期報告については以下を参照：笠松 2014；笠松 2013［2014］．PTS による本計画の概要紹介も参照されたい："Digitizing Myanmar Manuscripts"（http://www.palitext.com/subpages/thaton.htm）．

研究促進のためには，情報を必要とする研究者の手元に安価にかつ速やかにデータが届く必要がある．このため，本計画では，情報学的支援の手法を模索している．この試みの一例としては［藤原・笠松・逢坂 2014］を参照．

2）嘗て Norman が挙げたパーリ研究の「将来の課題」に対する応答の試みでもある．彼が挙げた課題を要約すれば以下の通り：1. 誤記・誤植等の問題を抱えた校訂本の再校訂，2. 復註類や東南アジア地域で著述された文学・伝統文法学等のパーリ語文献の校訂出版．それらの成果の下に 3. 現代的水準に基づく新校訂本による翻訳研究と辞書・文法研究の推進．

3）清水・舟橋は以下の如く述べる：「所在目録に関わるデータベースを広く公開することは，仏教学のみならず，文学や民俗学，歴史学など様々な隣接分野の研究にも裨益するところは大きい」［清水・舟橋 2009：109］．

4）今夏発行の preliminary catalogue を参照されたい：William Pruitt, Sunao Kasamatsu, Aleix Ruiz-Falqués, Yutaka Kawasaki, and Yumi Ousaka, *Manuscripts in the U Pho Thi Library, Sadhammajotika Monastery, Thaton, Myanmar*, Philosophica Asiatica, Monograph Series 1 (Tokyo: Chuo Academic Research Institute, 2014)．インターネット上に前掲 catalogue 準拠の，サンプル画像付き電子版 catalogue を用意する："Digitizing Myanmar Manuscripts in Collaboration with the Pali Text Society"（http://hirose.sendai-nct.ac.jp/~ousaka/）．

5）本稿執筆時点までの調査実施状況は以下の通り：第一回（2013 年 2 月）Pruitt, Ruiz-Falqués，河﨑；第二回（同 8 月–9 月）Pruitt，笠松，河﨑；第三回（2014 年 3 月）笠松，Pruitt，Ruiz-Falqués；第四回（同 8 月）Pruitt，笠松．

6）蔵書中には，とりわけ 1927 年～1929 年の書写に係る写本が多数確認される．設立にあたって，僧侶養成機関附属図書館として相応しい図書を急ぎ収集しようとした事情が察せられる．但し設立後の年代を持つ貝葉写本は少ない．洋装本購入に軸足を移

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

したものと思われる．

7）1890 年代に筆写された写本が多数確認されるが，この間の事情は不明．

8）Cf. 橘堂 1997: 4–6.

9）Cf. 橘堂 1997: 60; v. Hinüber 1997: 170. この他 3 本の nissaya が見られる（UPT 217; 357; 363）．

10）Cf. 橘堂 1997: 10–13; v. Hinüber 1997: 163.

11）Gray 1894 は写本の異読情報を与えない．それ故，テキストに誤植ないし疑問点を含むが，本文を検討できない．これは多く Dīpankara and Dhammapāla 1900 で訂正可能だが，ṭīkā も含むテキストを再検討するための資料が必要である（例えば *Jināl* 1b *pūretvā pāramiyo tidasa-m-anupame bodhipakkhīyadhamme*「*pāramī* たち（恐らく韻律上，Thar-lay No. 36, UPT. 493, Dīpankara and Dhammapāla と共に *pāramīyo*）［即ち］30 の，匹敵するもの無き菩提分諸法を満たし」; *Jināl* 174c *sattāhaṃ sattamevaṃ vividhaphalasukhaṃ* $^{+}$*vītināmesi* [Gray *vitināmesi*] *kālaṃ*「彼は七つの七日の間，このように，様々な［悟りの］果実の楽しみを，時を過ごした」）．

12）調査の成果の一部として，前掲註 4 に言及した我々の Catalogue には Appendix に Ruiz-Falqués による "Two Treasures of Pāli Literature from the U Pho Thi Library in Thaton: The Saddanīti-ṭīkā and the Mukhamattasāra" を含む．

13）Cf. 橘堂 1997: 52–53. 同著者は Vinaya 綱要書（*Khuddasikkhā*）に対する註 *Khuddasikkhā-ṭīkā* の作者でもある（本文は UPT 513.2, nissaya は UPT 204 & 517.2 等）．同著者の *Sambandhacintā*（「Moggallāyana 文法にもとづく統語論に関する作品」［橘堂 1997: 44］）に対する ṭīkā: UPT 554.4 *Sambandhacintā-ṭīkā* 等も見られる．

14）Cf. 橘堂 1997: 31; v. Hinüber 1997: 179–80.

15）文献は: Isaacs 2014. デザインの点でも興味を惹く点があろう．英国植民地時代には英文アルファベットを取り入れた作例もあり，当時の彼らの創意工夫を垣間見ることも出来る（Isaacs 2014: 96 を参照: "BEST ONE", "NUMBERONE" と品質を誇る例，"MANUFACTURE BY MA PWAR MYA" と製作者の名を編み込む例等）．

16）嘗て現地で作成されたリストに登録されているものの，現在は所在を確認できない写本も存在する（以下の三写本: UPT 77 *Kāludāyī lyhok thuṃ*; UPT 91 *Candagāmaṇi-Jātaka*; UPT 691 *Jātaka-ṭīkā-pāṭh* (*pa*) *thup*）．

17）本計画に於いては，斯界に速やかに基礎的情報を提供するため，蔵書の悉皆調査とカタログ作成及び出版を優先した．

18）外国人研究者が調査に訪れていることが人づてに知られ，同僧院は地域で新たな（即ち，文献学的な見地からの）注目を集めつつあるようである．僧院は写本閲覧を求めるタイ人僧侶の訪問を受けた由．2014 年 8 月の我々（笠松，Pruitt）の調査中も，やや南よりの地域の Mon 人僧侶が来訪した．

19）勿論，上掲註にある如く，図書閲覧を希望する者への対応も行う．なお，コンピュータを始めとする機器操作は一部男性陣が担い，カタログ草稿の取扱及び編集補助は特定の年配の女性二人が携わる等，役割分担がはっきりしていることを付記する．

20）筆写の最も根本的な動機は，文献学に資するため，貝葉写本が散逸する前に電子的

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

副本を作成することにあった．無論この際，データは現地にも残す．

21）貝葉の汚れをレモングラス入りのオイルで清掃した後，貝葉の頁を整序し，写真撮影する．写本のチーク・カバーや包み布が不足，乃至破損していればこれを新規のものに入れ替える．その後，厨子に適切に配置する．以上の作業は，他の同様の研究計画の場合，研究者自身が行うのが通例であろう．我々の場合，現地支援組織の面々がこれらの作業の相当部分を担ってくれる．それは彼らの本務の一つでもある．

〈参考文献〉

DĪPANKARA, W. and B. DHAMMAPĀLA. *Jinālaṅkāra*. Galle: Vidyaloka Press, 1900.

GRAY, James. *Jinâlaṅkâra or "Embellishments of Buddha" by Buddharakkhita*. Luzac, 1894 (Reprint, London: PTS, 1981).

von HINÜBER, Oskar. *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin: Walter de Gruyter, 1996.

ISAACS, Ralph. *Woven Miniatures of Buddhist Art Sazigyo: Burmese Manuscripts Binding Tapes*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2014.

笠松直「ミャンマー所伝南方仏教古写本調査報告――シャン州 Thar-lay 僧院を中心として――」『印度学仏教学研究』第 62 巻 2 号，2014 年，pp. 848–842.

笠松直「ミャンマー僧院所伝のパーリ語古写本の現地調査――初期調査概要の報告と今後の展望――」『論集』第 40 号，2013［2014］年，pp. 112–102.

橘堂正弘『スリランカのパーリ語文献』山喜房佛書林，1997 年.

NORMAN, Roy Kenneth. "*The Present State of Pāli Studies, and Future Tasks*." 『中央学術研究所紀要』第 23 号，1994，pp. 1–19 (= *Collected Papers* VI. Oxford: PTS, 1996, pp. 68–87).

NORMAN, Roy Kenneth（山崎守一訳）「パーリ研究の現状と今後の課題」『中央学術研究所紀要』第 24 号，1995 年，pp. 1–29.

清水洋平・舟橋智哉「Wat Ratchasittharam が所蔵する貝葉写本―― Phra Pariyatti School 内の写本調査から――」『パーリ学仏教文化学』第 23 号，2009 年，pp. 93–114.

藤原和彦・笠松直・逢坂雄美「貝葉古写本研究への電子工学的支援について――ミャンマー仏教古写本の「電子ブック」化の提案――」『南アジア古典学』第 9 号，2014 年，pp. 199–206.

(2012 年度・KDDI 財団・調査研究助成「ICT 支援南方仏教文化研究と情報発信」; 2013 年度・科研費（挑戦的萌芽研究）「ミャンマーの南方仏教・パーリ語古写本と絵画資料の現地調査及び研究」（課題番号 25580010）; 平成 25 年度・三菱財団・人文科学研究助成「ミャンマー所伝南方仏教史資料の国際協同現地調査」による成果の一部)

〈キーワード〉 ビルマ仏教，貝葉写本，U Pho Thi Library

（仙台高等専門学校准教授）

NII-Electronic Library Service